自己肯定感が高まる性（生）教育を模索

宇部ＲＣ　金子　法子

小学生への性教育講演を行う金子会員

私は、山口県宇部市で先代の亡き実父より引き継ぎ、開業53年目の針間産婦人科の院長として、地域医療に従事しております。20年前、父が他界した頃、診療の合間を縫って地域の性教育講演活動を始めました。

当時、当院でも中絶手術の件数は少なくなく、そのたびに男性任せの間違った避妊方法と基本的な性知識の欠如に直面し、また思春期の自己肯定感の低い女の子たちと対面してきました。そこで「待っているのではなく、よし、外に出ていこう！」と意を固め、近隣の学校での性教育講演を始めたのです。講演を行うにつれ、徐々に県内の小・中・高校からの性教育講演の依頼が増えていきました。

性教育講演では、産婦人科がどのようなところなのか。体の性差からくる男女それぞれの変化、こと妊娠に関しては、産むも産まないも背負っていくのは女性であること。それに対する責任と覚悟。どんな性と生のドラマが繰り広げられているのか。当たり前と思っていた自分の命が、実はたくさんのつながりの中で、生まれるまでさまざまな力と愛で存在してきたこと。さらに、目に見えるハンディキャップだけでなく、さまざまな成育歴、家庭環境、性的マイノリティー（ＬＧＢＴｓ）など、目に見えない生きづらさを抱えている人がいることへの想像力や心配りなど多岐にわたった内容を、60～90分の限られた時間の中で、児童や生徒たちの心に残るよう、日々の新しい知見も入れながら話してきました。講演回数は、昨年を除いては、年間30回くらい行ってきましたので、その都度児童や生徒から頂いた感想文は段ボール箱何箱にもなりました。私の何よりの宝物です。

教員ではないから話せること

小・中・高の学習指導要領では性交の扱いがなく、中学校でも避妊について教えないことになっています。しかし、正しい性の知識を知らないために、気が付けば母体保護法上、人工妊娠中絶を受けられなくなる妊娠21週を過ぎてから、当医院に来る中・高生も少なからずいました。私は学外の講師ですから、学習指導要領の縛りもなく、学校長などとあらかじめ相談の上、正しい避妊方法にも触れるようにしています。しかしながら、性交そのものは、人を愛する行為として否定するものではないという考えから、最近では車のドライブに例えて性について話しています。「ドライブそのものは楽しいけれど、ちゃんとルール

©iStock/tommy

を守って運転しないと危ないよね。だから今日はドライブの喜びとルール、どちらも伝わるとうれしいです」といった内容のスライドを作り、説明しています。

避妊に関する知識も最近はＳＮＳ（スマートフォンなど）から入手する子がほとんどです。アダルトサイトの影響もあり、膣外射精をすれば妊娠しないと信じている子どもが多くいます。そうした間違った性知識を正しながら、性交渉の際の相手との同意の取り方についても話しています。また、妊娠週数の数え方も、分かりやすいイラストにしています。例えば、エイプリルフール（４月１日）の日に性交があれば、出産予定日はクリスマスイブ（12 月 24 日）のころ。花火大会（７～８月）のころにはもう産む選択肢しかない、と。「皆さんが思っている以上に、産む産まないを決められる期間は短いのです。『桜、花火、クリスマス』と覚えてね」と伝えます。

性教育は昔と違い、男女一緒に行っています。男女一緒に聞くことで、それぞれの身体の違いや互いに大変なところなどが理解でき、子どもたちの感想文からも分かるように、お互いを慮り、身体だけにとどまらず、生に対しての尊さや感謝の心を覚えてくれています。

固定観念を捨てて話す

性という字はりっしん偏の「心」と「生」で成り立っています。恋し、愛をもって自分も相手も大切にして、初めて心が生き生きして交わるのが性交であること、相手を思いやることの重要さを話します。また、話す側も相手の立場を慮ることを忘れてはいけません。「親からもらった大切な命」と話せば、施設などから通っていたり、愛情が希薄な親子関係による成育歴を持った子どもが傷ついたりする可能性があります。「お母さんが何時間も苦しんで生まれた」と話せば、麻酔を使った帝王切開や無痛分娩で生まれた子どもが、「男らしく、女らしく」と話せば、性的マイノリティーの子どもが傷つきます。こうした固定観念で話すことは、決して行ってはいけないと思っています。むしろ、生きていくことに何らかの生きづらさを抱えている子どもたちにとって、少しでも自己肯定感が高まるような内容になるよう留意して話しています。自分の言葉に責任を持てているか、まだまだ道半ばです。

ロータリーでできること

性教育活動に加えて、産科医としてこれまで当院でたくさんの 10 代の妊娠・出産に関わってきました。10 代の妊娠は未婚や予期せぬ妊娠が多く、結果として人工妊娠中絶となるなど、母子の健康に大きな影響を及ぼします。また、月経にまつわる悩み、性別違和、学校や家庭における生きづらさなど、なかなか人には相談できない性や生に関する悩みをカウンセリングし、適切な医療へとつなげる「にじいろ外来」を行っています。そうした経験に基づいて、ロータリーの皆さまにも現状を知っていただきたいという思いから、当クラブで「若年妊娠

※（上図・イラスト）金子会員が性教育講演で使用したスライド

の現状と課題」と「ＬＧＢＴｓ―性的マイノリティーについて」、宇部西ロータリークラブ（ＲＣ）では「イマドキの若者の性と生教育～社会が寄り添うには～」の題目で卓話を行いました。

近年では地区補助金を活用して、毎年の運動会に参加したり、園児の親御さんの相談に乗ったりと日頃から関わりのある児童発達支援センターうべつくし園にジャンピングマットやトランポリンを寄贈しました。さらに、ＤＶ（ドメスティックバイオレンス）被害者の相談やシェルターなど総合的なＤＶ被害者支援事業を行っている、ＮＰＯ法人山口女性サポートネットワークへパソコンなどを寄贈しました。私自身、これまでもたくさんのＤＶ被害者の診察や相談を受けてきました。コロナ禍で昨年度のＤＶ被害は急増しています。小さい時から「ＮＯ！」と言える勇気や、「デートＤＶ」について性教育の中で話す大切さを感じています。

性教育のさらなる充実、どんな環境に生まれてきても未来は変えられるという思いと、「あなたはあなたのままでいい」という自己肯定感を高められるような母子への関わり、ＤＶや性被害の撲滅、性的マイノリティーの人たちへの支援……。まだまだ母子の健康にまつわる課題は山積していますが、これからもロータリアンとして、さまざまな多様性と生きづらさに寄り添い、困り事を抱えた人たちにとっての寄港先の一つでありたいと思っています。

（第2710地区　山口県）

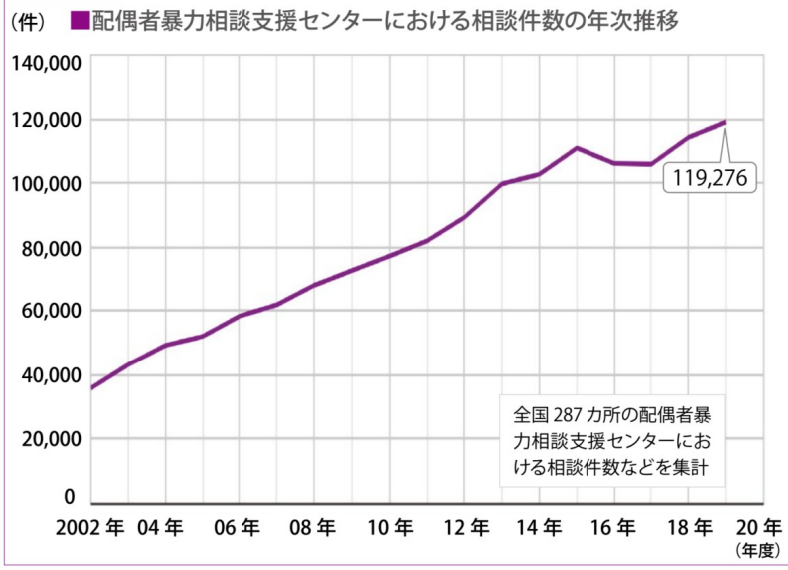
性教育を受講した子どもたちの感想

赤ちゃんはみんなハッピーに生まれるとはかぎらないということが印象に残りました。**子どもをつくるということはとても責任の重いこと**だと分かりました（中２男子）／中学生で妊娠・出産をしている人が50人近くいて、とても驚きました（中２女子）／自分の体を大切にし、男性にもきちんと自分の意志を言えるようにしたいと思いました（中２女子）／男子は生理の大変さなど女子の事をよく知らないことがわかりました。**「身体」と「心」と「好きになる相手」はとても大事**で、外見だけで決めつけはいけないことが大事だとわかりました（中１男子）／性教育はいらないと思っていましたが、話を聞き、知らないこともたくさんあり、犯罪などに巻き込まれないように気をつけようと思いました（中１女子）

小学生保護者からの感想

思春期の子どもや**私たち親世代もまだまだ性教育について積極的に話せる雰囲気ではない**ので、楽しく聞きました。私も子どもたちに伝えていくことで、恥ずかしいことではない、知らないことの方が罪という感覚を忘れずにいたいと思います。

データで見る　ドメスティックバイオレンス（ＤＶ）



ＤＶは増加傾向にあります（左図）。相談者の内訳は2019年度（4月から1年間）で女性11万6,374人、男性2,902人。被害者の98％が女性ですが、男性の相談も増加しています（02年度の男性割合は0.4％、19年度は2％）。また、新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、外出自粛や在宅勤務を余儀なくされる中、生活への不安やストレスによるＤＶの増加が深刻化しています。内閣府の性犯罪・性暴力被害者のためのワンストップ支援センターに寄せられる相談件数は、2020年4月～2021年1月で16万2,241件。前年同期の約1.5倍と増えています。

（内閣府男女共同参画局の発表を基に作成）